緑爽会

緑爽会報　NO.122
'13年10月20日
発　行
公益社団法人
日本山岳会　緑爽会
☎ 03-3261-4433
事務局　松本恒廣
夏原寿一　近藤雅幸
近藤　緑　川口章子
渡部温子　福原妙子

行楽の秋が来ました。
学習の季節でもあります。

会報に皆さんのレポートをお待ちしています。

緑爽会年内の予定

◆シンポ「高橋健治とローゼ夫人の生涯」
10月25日（金）18時～
JAC104号室　既報

［緑爽会11月山行］
◆秋の奥多摩ハイク
御岳山から日の出山を経て吉野梅郷へ

日・時　11月14日(木)日帰り（雨天中止）
集　合　青梅線御岳駅改札口9時30分
コース　御岳駅＝バス＝滝本＝ケーブル＝頂上駅→御岳山→日の出山→蓼平神社→梅林→日向和田駅　約3時間半
地　図　2万5千　武蔵御岳・五日市
係　瀬戸英隆
参加される方は電話かFAXで係まで。044-966-9357
11月5日迄にお願いします。

●集合時間が前号予告より1時間遅くなりました。遠い方もお出かけください。

［忘年会］
◆お話&懇親会

日・時　12月10日（火）13時～
場　所　JAC会議室
講　演　佐藤淳志会員
「鳥海山のイヌワシと共に生きて」（仮題）
終了後、忘年懇親会を予定。
会費等、詳細は次号に掲載。　事務局

七国山にて　前列左から中尾・川口　後列大島・手塚・渡部・島田・瀬戸・中村の皆さん　撮影・横山

［緑爽会9月山行］

野猿峠から
御殿山を通り七国山

中村好至惠

好天の下、横山隆氏をリーダーに八王子から町田市に跨る丘陵地帯を歩いた。いつも山に行く時に通っている『八王子バイパス』の周辺に拡がる緑地帯であり、コース後半ではそのバイパスに架かる橋を渡り、車中から見上げるだけだった所を実際に歩く事ができ、内心感動だった。

参加者総勢10名（1名途中まで）。秋めいてきたとは言え、当日は汗ばむ陽気。午前9時に京王線長沼駅改札に集合。まずは住宅街から始まり、ひたすらリーダーの後を付いていく。暫く散策路などを行き、広い車道を渡ると野猿峠の跡（水飲み場や石碑）に到着。そこからは車の往来がある歩道を通過し小さな沢を渡ると山道らしくなる。「絹の道」という養蚕が盛んだった往時を偲ばせる道へは、気分のいい丘陵地や、かなりヤブっぽい踏み跡程度の所などをズンズンと歩いていくが、二度と同じ所を歩けないだろうと思った。

暑い陽気とは言え、足元にはゲンノショウコ、ヤマジノホトトギス、ツユクサ、ミズヒキ、アカマンマと云った馴染みの秋の草花が可憐に咲いている。途中ではキジ♂も見かける。空には中秋の名月の名残り、下弦の月。

11時、二等三角点がある御殿山に到着。初めての大休止を取りひと心地つく。以降も笹が茂る踏み跡や散策路を辿る訳だが、これが来てみてビックリの「キノコの道」！　何種類ものキノコがきれいに発生しているが、目玉（唯一分かるの）はタマゴダケ。真っ白な卵形の幼菌から生まれる真っ赤なキノコは一見、毒キノコ風。しかし実は大変美味。途端、「キノコ目」になったまま七国山まで歩き、他の方の協力も得ながら大収穫する。（キノコスパゲティにして戴きました。）

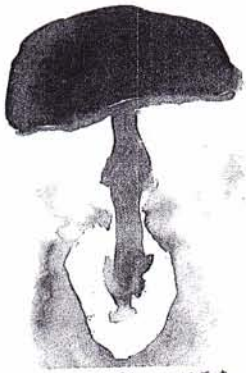
13時過ぎに七国山到着。ちょっと遅いお昼となる。祠のある広場にて昼食を取り、記念撮影後14時に出発。「何もないよ」とリーダーが念をおしていたJR横浜線相原駅前にも、不思議な『沙羅の木』という人の家の応接間的な喫茶店？があり、全員で和気あいあいと打ち上げをした後、解散した。

リーダーには迷路のような往時の生活路を案内して頂き、心より感謝します。参加者の皆さんにもお世話になりました。

（実施日　2013年9月28日）

★

［参加者］渡部温子・鈴木快信・大島洋子・島田稔・瀬戸英隆・川口章子・中尾千予光・中村好至惠／手塚照子　L横山隆　計10名



タマゴダケ　好至惠

早川瑠璃子さん急逝！

謹んでお悔やみ申し上げます。

（関連記事は2ページに掲載）　緑爽会事務局

【追悼】

早川瑠璃子さん

―満月にかぐや姫のように逝く―

（１９３０年～２０１３年）

関塚 貞亨

九月二十日の夕刻、外出から帰り玄関の扉を開けると電話が鳴っていた。留守電の応答が出ないうちにと急いで受話器をとると、「早川ですが…」何時もの声と少し違う、少し間をおいて「母が亡くなりました」頭がフリーズしてしまって、すぐには言葉が出ない。電話は早川瑠璃子さんの愛娘の里奈子さんからだったが、私は八十八年も生きているのに、お悔やみの言葉も、亡くなられた事情も聞かないまま電話を切ってしまった。

早川瑠璃子さんが山岳会に入会したのは一九五八年七月で二〇〇八年には在席五十年で永年会員に推薦されている。私は一九七七年七月の入会で年齢も五十二歳と遅かったし、勿論接点は無かった。どういうきっかけで交流が始まったのかも思い出せないが、三十年前後のお付合いのうち、私が心臓を患う前の十年前後は毎月のように山を一緒に登り、その後の二十年は緑爽会、スケッチの会、有志閑談会の交流で、楽しい思い出がいっぱいある。

私が山岳会に入会してよかったことは、優れた人格の人々に知己を得たこと、中には巨人と呼ばれるような山岳史上に残る人を含めて、老若男女の総てが尊敬できる人たちであったことは、この上ない幸せであった。その一人に早川さんがいた。

このように人に恵まれたのは、山研委員会や自然保護委員会、三水会などの集会に積極的に参加する中で、多くの人々と交流することが出来て、新入りの私を受け入れてくれて、優れた人人の知己を得たことはまことに幸運なことであった。なかでも入会して間もなくある集会で、神韻縹緲の山の中におられるような雰囲気を持っておられた島田巽さんをお見かけし、何時か山にご一緒したいと願っていた。それが数年後に奇跡のように実現し、最初の山行に小原達郎、晴子夫妻と早川さんが参加されたのである。それが早川さんとのお付き合いの始まりであったように思う。

'１２年忘年会の早川さん

三～四時間のピクニックのような山行は、山頂でのレトルトのチャーハンとベーコンエッグ、コーヒー、ときにゆで小豆などで、また山麓でランチのときもあったが、ビールなどアルコール類の乾杯はなかった。いま考えると申し訳ないことであったが、それでも皆さんは楽しみにしておられたと思っている。この山行は島田さんが亡くなられるまで年四回の割合で続けられた。島田さんは一九九四年のヴァレンタインの日に早川さんが贈ったチョコレートを持って入院され、そのまま逝かれてしまったのである。

鮮やかな記憶がある。三浦富士に登ったとき、早川さんが山頂でバターたっぷりのオムレツを作ったのだが、オムライスのような見事な紡錘形に成型されていて、このときは織内信彦さんと太田敬さんも参加、織内さんがこの見事なオムレツだけを写真に撮った。

そして町田大丸の登山教室で二人で講師を務め、十年間に亘って一緒に登山をしたこと。初級を受け持ったのだが、大丸から生徒は女性が多いので女の講師が欲しい、ということだったので、お願いすると快諾されたのが始まりであった。この講座は講義一回、二回の登山で卒業し、中級に移るのが建前だが、生徒の殆んどが留年し、定員二十五人のメンバーが同好会か登山クラブのように続けられた。そしてハイライトはご主人の定男さんも一緒だった一九九六年のスイス旅行である。グリンデルワルト、ツェルマット、シャーモニーでは普通の観光旅行ではないところにも案内できて良かったと思っている。

この追悼を依頼されたとき、あらためて早川さんが書いた『山岳』第一〇一年の今井喜美子さんの追悼を読んだ。そして今井さん主宰の日本酒の飲み会「喜の会」の出席者に片岡博、宮下啓三の名を見て思い出すのは二人とも酒品のよき人であった。私は酒が飲めないので、酒席での同席は少ないが、今年の有志閑談会で隣の早川さんの食事のマナーのよさに感心した。そして早川さんの人脈の広さと、人選の見事さに感服している。

十年以上前の有志閑談会で、山岳会会長を辞めたばかりの藤平正夫さんの隣で親しくお話をされていた。無類に山に強かった若いころの藤平さんと親しいお友達だった。藤平さんは中学生のころから剣で鍛えられ、芦峅の案内人も一目おく存在だった。羨ましい。

強靭な体力の藤平さんだから、美しいけれど難しいカラコルムのチョゴリッサに初登頂されたのだが、十八時間の苦闘、桑原武夫総隊長との蘊蓄ある会話から桑原さんをして「藤平さんは経済学部でなく本当は文学部…」と言わしめたなど、生粋の山岳人ながら幅広い文化人であった藤平さんの話は『山岳』第九十九年の平井一正さんの追悼記に詳しい。私は晩年の藤平さんと自然保護の関係で知己を得たが、二十年ほど前のこと、片品のロッジで島田巽さんと藤平さんと私の三人で三ヶ月四方の狭いお風呂に入ったことがある。宝物のような一生の思い出だが、共通の畏友お二人と、早川さんが男だったらその風呂で一緒に款談したかも、と考えることがある。

九月二十六日の代々幡斎場での葬儀は出席者の多かったこと。山岳会関係でも越後、会津、山梨から、また山岳会を退会した懐かしい人にも会えて、早川さんが広く愛されていたことを改めて思った。

式場には早川さんの略歴、ご家族、ご親族の思い出を綴られたコーナーがあり、見かけとは違って早川さんは実にエネルギッシュな方だったと知った。多彩な趣味の会合にすべて参加しながら、家事に手を抜くことは無かったし、よき教育ママでもあった。

趣味では表千家の宗匠で華道は池坊、俳句の会、懐石料理教室に通い、山岳会では婦人懇談会委員長と海外連絡委員を務めあげ、同好会の三水会、土曜会、二火会、山ゲラの会、緑爽会、美術倶楽部サン燦会の会合に殆んど皆勤していた。ご主人の定男さんによれば「手帳に年末までの出席予定がびっしりと書き込まれていた」という。

そして中秋の満月の深夜、カナダ旅行の思い出を原稿用紙に清書し終ってから、脳内出血で急逝された。私は二十日に市大医学部の高齢者へのアンケートで死にざまを問われ「長患いは最悪、ぽっくり逝くのが理想」と答えて帰ってきたばかりのときに早川さんの訃報を聞いたので、ひとしおの感慨があった。

東大文学部哲学科出身のご主人のご挨拶も見事だった。「亡くなった直後は、もっと気をつけてみてあげられなかったかと自責の念に駆られたが、ピンコロリンと中秋の満月の夜に逝ってしまったのは天晴れと思えるようになった」と…。

佳人は「かぐや姫」のごとく急いで月に向かって逝ってしまった。享年八十三歳。合掌

山脈・人脈　思い出の人

西堀栄三郎さんと ウエストン祭の二日間

国見　利夫

西堀栄三郎さんは旧制第三高等学校、京都帝国大学理学部で一貫して山岳部に属し、北岳三山積雪期初登、剱・三の窓チンネ、クレオパトラニードルの初登等、近代アルピニズムの先駆者だ。

更に第二次世界大戦後の１９５２年に初めてネパールに立った外国人である。戦時中、長く国を閉じていたネパールは日本人は勿論、外国人は一切入国させていなかったから、このネパール訪問は外国人として初めての入国だ。そして第二次世界大戦の敗北で、日本はまだ空への旅を制限されていただけに、この訪問は画期的な出来事だった。

この時の訪問で早くも８，０００ｍ峰の一座マナスルにねらいをつけ登山許可を求めて訪ネした西堀さんの慧眼は敬服に値する。この時期まだ地元のネパールですらマナスルの存在を確認していなかった。

この訪問が１９５６年の８，０００ｍ峰１４座の未踏のマナスルに日本山岳隊の初登頂につながる。

また、西堀さんは１９７３年のＡＡＣＫのヤルン・カン遠征隊の隊長として登頂に成功している。

三高、京大山岳部は登山を越えて、探検という巾広い視点で活動している。

その一つ。

１９５６年とその翌年の第１次南極観測隊の副隊長として、越冬し観測に成功、科学者として手腕を発揮された。

更に原子力の研究者として原子力研究所の理事などを勤め、自らも原子力船に乗り、その安全性につとめられるなど京大探検精神の体現者。学者としては、日本に品質管理学を導入、発展させデミング賞を受賞されている。

南極初の越冬を果たした西堀さん(左端)

我々岳人に身近な話題では、広く岳人に唱われている「雪よ岩よ我らが宿り、俺たちゃ街には住めないからに……」の雪山讃歌は西堀さんの作詞であること。メロディはアメリカ民謡のＯｈ・Ｍｙ・Ｄａｒｌｉｎｇ。今でも作詞権は西堀さん―京大山岳部が持っている。

西堀さんは１９７７年に第１３代日本山岳会々長になられた。その二期目の１９７９年の第３３回ウエストン祭のことを書く。

ウエストン祭の直前、副会長の折井健一さんから職場に電話があった。「今、新宿駅にいる。これから一足先にウエストン祭に出掛けるが、君は西堀会長と一緒に明日出発しろ。西堀会長は“ぼくは独りでは嫌だよ”と言っているから必ず来い。グリーン車だぞ。松本駅では裏口に回れ、信濃支部から迎えの車が来ているから、あとは支部にまかせてよい」と一方的に伝えて電話が切れた。西堀会長がウエストン祭に出席するなら、副会長の折井さんが同行するのが本当なのに、自分は若い会員とにぎやかに前日立ちして、徳本峠越えを楽しむつもりらしい。私もウエストン祭に関心があったが、仕事の関係で前日の休みがとれないため、当日の式典に参列するだけで上高地に出掛けるのもつまらないと、今回は見送るつもりのところだった。

当日、新宿駅特急あずさのグリーン車に早目に乗車したが、既に西堀さんは席について機嫌よく迎えてくれた。

当時、私はまだ会では何の役職にもついておらず、単なる自然保護委員だったから余り西堀会長との接触はなかったが、西堀さんはあのソフトで上品な京都弁で話しかけてくれた。

―西堀会長のはなし―

茨城県東海村に原子力発電所が出来て人の出入りが多くなったので一人の商人が一杯飲み屋を開店した。原子力村だから放射線名を付けるよう西堀さんにお願いして無害の放射線名をつけてもらった。店は繁盛したが、そのうち放射線洩れ事件がおき、店から客が離れてしまった。店長がやって来て「ウチの店名の放射線は無害」と証明してくれと云ったので、西堀栄三郎署名の「この放射線は無害」と大きく店内に掲示して、客足が復活した。

また、原子力船に放射線漏れが発生したとき、大騒ぎするな。「ふのりを貼っておけ」と処置させた。伝え聞いた報道機関がこの手軽な措置を批難したが、後にこの措置が科学的に適正だったことが立証された。

登山の話は余りなく、原子力の解りやすい裏話で、新宿―松本はまたたく間に過ぎた。

松本駅では支部長が迎えてくれた。上高地までは長丁場。途中2回のコーヒータイムをとったが、西堀会長は日本茶党、うまい日本茶を出す喫茶店さがしに苦労していた。

西堀会長の到着を迎えて、会長を中心に早目の晩さん会が開かれた。私は会長付きと云うことで会長の隣の上席を与えられた。前日から滞在していて梓川の渓流でイワナ釣りをしていた学生部の連中が、釣ったイワナは成果が少なく少量なので、特別に会長と私だけの食前にそえられていた。しかも生の「さしみ」である。当時梓川の汚染が伝えられていて大腸菌事故が心配だったが、隣の西堀会長が何のこだわりもなく無造作に口にしているのを見て私もこれにならった。

ひととおりセレモニーも終り、宴たけなわになった時。折井副会長がやってきて「到着早々で会長は疲れていると思うのでここで退席してもらう。君は会長を案内して西糸屋に

２０１１年４月　旧西堀邸での緑爽会集会　中央が３男の西堀峯夫さん

行き、もうここに戻らなくていい。今夜は会長と一緒に西糸屋に泊るんだ。西糸屋では穂苅君がすべて取りしきってくれる。」おやおや、これからが久し振りの岳友との歓談だと思ったが―。

穂苅さんは梓川沿いの景観のよい部屋を用意してくれ、会長は早速お茶を入れてくれた。当夜は早目に静かに寝た。

翌朝、物音に目をさますと、西堀さんは既に起きていて「さあお茶が入りました」と差出され恐縮しながら目ざめのお茶を戴く。散歩に出ましょう、との誘いに早朝の静かな上高地で二人だけの散策をした。人気の全くない神々しいばかりの上高地だった。

ウエストン祭は西堀会長はじめ折井副会長、織内評議員らの挨拶、エーデルワイスクラブの合唱、ウエストンのレリーフへの献花などで無事に終った。私のお役も終ったので、穂苅さんに帰宅の挨拶をすると、「あなたは西堀会長と一緒の列車で、今グリーン車の特急指定を求めて松本駅に人をやっている。帰りの指定車が決まれば車で松本駅まで送る手はずになっている」という。

そうして、とうとう33回ウエストン祭の2日間を西堀会長と共にすることになった忘れられない思い出の2日だった。

西堀会長は1989（平成元）年4月13日、順天堂病院で肺炎のため逝去された。86歳だった。あのウエストン祭から10年目だった。

（緑爽会元代表）

注・西堀さんは今西錦司、高橋健治と並んで三高三羽烏と言われた人。西堀さん自身が設計した旧西堀邸は、地下壕を備えて戦時下の空襲にも残り、あの3・11の大地震にもびくともしなかった。だが、あの日、お会いした峯夫さんは亡くなられた由。 K.

人との出会いに感謝（承前）

シンポジウム担当　**近藤　緑**

昭和20年代、敗戦後の混乱の中で、遺児エリザベスと養女エリカを連れて京都から上京したローゼ・レッサ。どんなにか苦労が多かったろうと思うのに、往時を追想した文章はとても明るかった。それに背を押されるように私は、一足早く秋の気配が漂う八ヶ岳山麓清里に布川謙さんを訪ねた。

駅の近くでお茶でも飲みながら話が聞ければと考えていた私だったが、布川さんはすぐ近くだからと、別荘地の一画にある瀟洒な住宅に案内してくださった。

奥さまをまじえてローゼさんや父、角左衛門さんのことなど話ははずんで、小淵沢から義妹が迎えに来るまでの1時間半はすぐにたってしまった。

アメリカで牧場経営を学んで帰った謙さんと話すうちに、彼は長野県小谷村に養護施設「共働学舎」を開かれたクリスチャンの宮嶋真一郎先生の教え子で、現在、小谷と北海道の施設を継いだ宮嶋先生の子息、望（のぞむ）さん信（まこと）さんとは同じ牧場で働いたこともある仲だという。それを聞いた途端、私の心は、もう小谷の空へと飛んでいた。

★

帰京するとすぐ、小谷温泉に電話を入れた。「週末に行きたい」と。

雨飾山山麓にある小谷温泉山田旅館は、深田久弥が愛した宿で知られている。戦時中、疎開した私が入学した豊科高女（現豊科高校）で、下級生だった美園さんが雪深いこの宿に嫁いでいた。舅・姑に仕え、夫に先立たれた今も立派に大女将として宿を守っている。

舅の山田寛さんはこのあたりにスキーを広めた功労者である。現在の当主は、孫の誠司さんだが、寛さんの夢を見事に開花させ、姉の裕美さんともども国体で優勝するほどのスキーの名手である。

寛さんがまだ存命の頃、泉久恵さんらと『小谷温泉讃歌』という本を作った。寛さんからの聞き書きに、ゆかりの人達が原稿をよせて大森久雄さんが1冊に纏めた。その『小谷温泉讃歌』に寄稿したのが、晩年のローゼ・レッサで、その翻訳をしたのが、今回のシンポジスト・坪井靖子さんだった。

スキーの指導に来た健治の死後も、寛さんはローゼさんを招いては大切にもてなした。舅思いの美園さんも、同じ気持ちをもち続け、ローゼさんも**Misono**が大好きだった。

10年前、美園さんから電話があって「ローゼさんが亡くなったので、葬儀に上京する。ついては道案内をしてほしい」と言われた。

だから私は、ローゼさんとは、死後の対面をしただけである。葬儀に集まった紳士淑女は、厳粛に「モア・ジョイの誓い」を唱和し、ローゼさんの遺言「私に2本の赤いバラを持たせてください」を読み上げたのだった。

★

小谷温泉では、久し振りに訪れた私に「どこへ行きたいか」と言ってくれた。行きたいところは健治とローゼさんの夢の跡、京大笹ヶ峰ヒュッテよりなかった。

翌日、誠司さんの運転で美園さんと訪れた笹ヶ峰ヒュッテは立派に建て替えられていた。人影はなかったが、庭にブランコやハンモックがそのままで、今も若い世代に愛されている小屋であることがわかった。秋草の中で、美園さんはローゼさんとここを訪ねた時のことを思い出していたのだろう。後で調べたら、ローゼさんが最後に訪ねたのも、今の私と同じ81歳だったことがわかった。

それから後もローゼさんは、温泉治療の視察に行く美園さんに同行してドイツに出かけている。よほど頑健な人だったのだろう。それに引きかえ、杖をはなせないわが身が情けなかったが、それでも来られてよかったとしみじみ思った。

昔、妙高から小谷温泉を目指して歩き始め、雨で果たせなかった。それでも行こうと糸魚川回りの列車に乗り、夜になってから小谷温泉に着いた。同行5人。今、残っているのは私ども夫婦だけである。

嫁いで間もない美園さんとはその時以来のお付き合い。50年ぶりに、逆に小谷から笹ヶ峰、妙高へと走って念願を叶えてくれた山田旅館の母子には心から感謝している。

（了）

写真右は『小谷温泉讃歌』より転載。ほかは撮影・小泉義彦

山田誠司さん

スキーを語る山田寛さん
―山田旅館資料館にて―

―編集後記―

★早川瑠璃子さんの急逝は衝撃的だった。日本山岳会のよき時代を知る人が、また一人消えてしまった。近く女性登山史を語ってもらう予定もあったのに残念無念。JAC最後の貴夫人、さようなら。★秋のシンポジウムが近づいた。私にとっては、長い間、気にかかっていたテーマであった。多くの方のご協力で、宿題の一つが実を結ぶようにと願っている。（近藤　緑）